

国語総合の傾向

はじめに

医療の専門家を目指して本学への入学を希望されている皆さんは、いずれ医療専門職となって社会の様々な問題を抱えながら生活している人々とうまくコミュニケーションをとることが必要となります。そのためには、現代社会における人々のあり方を論じた文章を数多く読んで内容を理解し、それに対する自分の考えを持つことが大切です。筆記試験では、内容の読解までにとどめていますが、日本語を正確に読み、正確に書くことは大学での学習のスタートラインです。

傾向

- 1 マークシート方式による選択式です。
- 2 言語聴覚専攻科及びリハビリテーション学科（一般選抜・チャレンジ（特待生）選抜）は、現代文2題で、その内訳は評論2題または評論・随筆各1題です。
1問目の評論文の問題は科学・歴史・心理・哲学・文化など幅広いジャンルから出題される、やや硬質な文章で、内容把握が中心です。2問目の評論文または随筆文の問題は1問目よりやや柔らかめの文章で、内容把握のほか、さまざまな国語の知識が問われます。いずれの問題も高校の教科書レベルの文章が出題されます。
- 3 漢字の読み書きは必須で、語意、四字熟語・ことわざなどの知識問題も頻出しています。また読解問題は空欄補充、欠文補充、指示内容、内容説明、理由説明などの部分読解問題と全体読解問題（筆者の主張、内容一致など）に分かれます。
- 4 たとえ易しい印象を与える評論文であっても、受験生には馴染みのない評論キーワードが文中では使用されていますから、市販の入試問題集を解いたり、新聞や新書などを読んだりして、論理的、抽象的な文章に慣れておく必要があります。
- 5 評論文を読むための参考文献や、試験に際しての問題の取り組み方など、試験対策についてはオープンキャンパスの対策講座で入試のポイントを解説します。
- 6 大学入学共通テストと比べると、本文の分量も少なく、選択肢の長さも短いので、はるかに取り組みやすい問題です。
- 7 リハビリテーション学科（総合型選抜 第3回：公募推薦型）は現代文2題及び国語の知識問題小問集合、リハビリテーション学科（学校推薦型選抜）は現代文1題及び国語の知識問題小問集合です。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちのノスタルジーを大いに刺激してヒットした映画、『ALWAYS 三丁目の夕日』シリーズ三作は、一九五〇年代後半から六〇年代前半の東京を舞台とした作品です。そこに描かれていたのは、近隣などの地域社会や家族や親族といった共同体に支えられた人びとのつながりが、現在よりもはるかに⁽¹⁾濃厚な時代の生活風景でした。映画のコンセプトが「古き良き時代の^aナツかしさ」だったことから分かるように、私たちは豊かで良き人間関係の原型をこの時代に求めようとしています。しかし、じつは戦後の日本で殺人事件がもつとも多かったのもこの頃なのです。しかも⁽²⁾その多くは、つながりの濃い親密な間柄で起きたものでした。

映画『ALWAYS』には、就職先の家に住み込みで働く少女が登場します。東北地方出身の彼女は、生家の家計を助けるために単身で上京してきました。それはこの時代だけのことでありません。徐々に地方が豊かになり、彼女のような貧しい境遇から解放された後も、地方の若者たちは、都会で収入を得ようと集団就職の列車に乗り込みました。また、家庭の事情で^aそれが叶わ^{かな}なかった若者たちも、都会での生活に強い憧れを抱いていました。

当時、地方の少年たちの多くが都会を目指した理由には、商業施設や文化施設などの充実度が、都市と田舎では^bカクダンに違っていたため、都会での華やかな生活に憧れていた側面もあったことでしょう。しかし、ⁱそれだけが理由ではありません。生まれ育った地元での地縁や血縁といった人間関係の濃密さを、自分の人生を縛りつけ、可能性を閉ざす^x桎梏^{しちこく}のように感じて、その鬱陶しさから逃れたかったからでもあるのです。前者が引き込み要因とすれば、後者は押し出し要因といえます。当時は、両者が相まって彼らを都会の生活へと誘っていたのです。

このように、人情の豊かな社会だったといえる時代は、裏を返せば、その人間関係の濃密さと強固さによって、付きあいや行動の自由が制限された時代でもあったといえます。同様の事情は田舎だけのものではなく、都会にもまた見られました。人間の当然の心理として、自由が制限されていればいるほど、そこから逃れて羽ばたきたい欲求も強くなります。映画『ALWAYS』のなかで、いつもスクリーンの背景に刻々と積み上げられていた建設中の東京タワーは、高度経済成長へと^{まいしん}邁進^{まいしん}していた時代の象徴であると同時に、そんな人びとの飛躍への憧れの象徴でもあったことでしょう。

しかし、この映画のなかで田舎から上京してきた少女もそうであったように、当時、単身で都会へ出てきた若者たちが、そこで自由な一人暮らしを送ることは^a的な事情からも難しく、その多くは住み込みや社員寮などで集団生活を送らざるをえませんでした。地方から上京して就職した若者に対して東京都が一九六三年に実施した調査によると、彼らが不満を覚えるものの第一位は「落ち着ける^{へや}室がない」で、第二位は「自由時間が少

ない」でしたが、前者は一人になるための空間が、後者はそのための時間が、当時はそれぞれ希少だったことを示しています。

社会学者の見田宗介^{みたむねすけ}は、この調査結果を踏まえて、その背後には「関係からの自由への憧憬」があると述べ、当時の彼らの日常意識においては、関係欲求よりも関係嫌悪のほうが強かったと指摘しています。そして、当時の若者が置かれたこのような境遇を「まなざしの地獄」と形容しています。当時の若者たちは、いつも周囲の人たちからの視線にさらされ、甲に不自由さを覚えざるをえない状況に置かれていたのです。

したがって、その人間関係からは感情の衝突や、^Y軋轢^{あつれき}も起きやすく、いったん事が起こると、^ウそれは抜き差しならない決定的なものとなりやすかったといえます。このように、人情の豊かな社会における人間関係の濃密さと、その行き違いから生じるフラストラーションの強さは乙であり、その意味で愛憎は紙一重といえます。このような事情から推察すれば、この時代に親密な間柄での殺人事件が多かったという事実にも納得がいきます。まさに鬱陶しい「まなざしの地獄」がその背後にあったからなのです。

共同体とは、血縁のような生物学的な類似性や、地縁のようなB的な近接性だけで成立するものではありません。それらの固定的な人間関係から生まれる価値観の同質性が、その存続に大きく寄与しています。異なった人たちが利害を調整し、共存を目指す関係が公共性だとすれば、似た人たちが^エそれを根拠に集まり、支えあいを目指す関係が共同性です。とりわけC的な社会において、その価値観の同質性を保つための基盤として血縁や地縁が^{コウ}ユウ^{コウ}だったのは、その縁の境界を越える人口移動がまだ稀^{まれ}だったからです。イギリスの社会学者、アンソニー・ギデンズの表現を借りるなら、人びとの日常は地縁や血縁のなかに「埋め込まれて」いたのです。

しかし、一九七〇年代以降の急激な経済成長と人口の拡大は、人口移動率も大幅に増加させ、その過程で人びとの価値観を多様にしてきました。同じ景色を眺め、同じ対象を^{あが}崇め、同じ関係を生きる経験が徐々に失われ、多種多様な環境を生きるようになってきたからです。また、社会が成熟するにつれて、人生の目標がたんに物質的に豊かな生活の実現ではなくなり、精神的に充実した生活を求めるようになってきたからでもあるでしょう。かつての人生目標がかなり一般的で普遍性を有していたのに対し、^オ昨今の^オそれは人によって丙なものとなっています。その結果、共同体の成立基盤は弱体化し、その拘束力を弱めてきました。再びギデンズの言葉を借りるなら、近年はD的な人間関係からの「脱埋め込み」が進行しているのです。

このように、共同体の拘束力が弱まって、⁽³⁾人間関係が自由化してくると、関係に対する満足度は上昇してくるようになります。内閣府の調査によれば、家族といえるときに充実感を覚える日本の若者の割合は、一九八〇年代から現在に至るまで上昇しつづけています。また、地域社会に愛着を抱く若者の割合も上昇する傾向にあります。血縁や地縁といった共同体の抑圧力の強さに不満や反発を覚える若者たちは、いまではどんどん減少しているのです。

またこのような現象は、制度的な共同体だけで進んできたものではありません。友人関係のような E 的に作り上げられる共同体についても同様に当てはまります。かつては、同じ地域の住民だから、同じ学校の生徒だから、同じ部活の一員だからといったように、制度的な集団に同じく属することが、友だちや仲間との関係を支える上で大きな基盤となっていました。いまでも関係を作る最初のきっかけは当時と大して違っていませんが、しかしその後の関係を維持していく上で、制度的な基盤が果たす役割は大幅に小さくなっています。

たとえば、同じクラスメイトだからといって、自分と気の合わない相手と無理に付きあう必要はないし、同じ部活の先輩だからといって、その意向に無理に合わせる必要もない。集団の拘束力が弱まり、そのように考える若者や子どもたちが増えています。自分が好まない相手との関係に無理に縛られることが少なくなった結果、人間関係に対する満足度が上昇してきたのです。

こうして、地域のなかで、あるいは家庭のなかで、さらには友人関係のなかで、彼らが抑圧され、鬱積を抱えることは少なくなりました。自分の生き方を親が認めてくれずに特定の価値観を押し付けてくる、あるいは自分の思いを友だちが受け留めてくれずに一方的に非難される、そういった不満を ^dツノらせる若者たちは減りました。飛躍したい欲求を抱えた人たちが、その意思を ^eサマタげられずに自由に行動できる社会へと変わってきたのです。

（土井隆義『宿命』を生きる若者たち——格差と幸福をつなぐもの』岩波書店による）

問(一) 傍線部 a～e のカタカナにあたる漢字と同じ漢字を含むものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

a 1 b 2 c 3 d 4 e 5

- a ナツかしさ
- | | | | | |
|-----------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ホンカイを遂げる。 | ダムがケツカイする。 | コウカイ先に立たず。 | カイリツが厳しい。 | カイブツが現れる。 |

b
カク
ダン

- 1 光をカクサンさせる。
- 2 制度をカイカクする。
- 3 工事がホンカク化する。
- 4 物事のカクシンに触れる。
- 5 カクセイの感がある。

c
ユウ
コウ

- 1 社会にコウケンする。
- 2 練習のコウカがあらわれる。
- 3 物理学をセンコウする。
- 4 親にコウコウする。
- 5 事態がコウテンする。

d
ツノ
らせ

- 1 ボコクを離れる。
- 2 同級生をレンボする。
- 3 ボケツを掘る。
- 4 クラス会のメイボを作る。
- 5 劇団員をボシユウする。

e
サマ
タげ

- 1 犯罪をボウシする。
- 2 ボウケンの旅に出る。
- 3 勇気ある行動にダツボウする。
- 4 進行をボウガイする。
- 5 ムボウな計画。

- 問(二) 空欄 A 〽 E を補うのにふさわしい語を、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二度以上選んではいけない。)
- | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|---|-----|---|-----|----|
| | A 〽 | 6 | B 〽 | 7 | C 〽 | 8 | D 〽 | 9 | E 〽 | 10 |
| 1 伝統 | 2 環境 | 3 自発 | 4 経済 | 5 空間 | 6 固定 | | | | | |

- 問(三) 傍線部(1)「濃厚」と熟語の構成が同じものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。
- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|----|
| 1 舞台 | 2 上京 | 3 人情 | 4 希少 | 5 愛憎 | 11 |
|------|------|------|------|------|----|

- 問(四) 傍線部(2)「その多くは、つながりの濃い親密な間柄で起きたものでした」とありますが、筆者はその理由をどのように考えていますか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。
- 12

- 1 濃密な人間関係にあつては、人々の価値観が多様で衝突しやすいから。
- 2 人間関係が濃密であるがゆえに利害が対立して、共存しづらくなるから。
- 3 人間関係が濃密であればあるほど、感情の衝突も起こりやすくなるから。
- 4 濃密な人間関係から逃れようとして、多くの人々が都会を目指したから。
- 5 濃密な人間関係は、価値観を同じくする血縁や地縁に基づいているから。

- 問(五) 傍線部ア、オの「それ」の指示する内容としてふさわしくないものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。
- 13

- 1 ア 〽 集団就職
- 2 イ 〽 都会での華やかな生活への憧れ
- 3 ウ 〽 感情の衝突や軋轢
- 4 エ 〽 公共性
- 5 オ 〽 人生目標

問(六) 傍線部X「桎梏」、Y「軋轢」とほぼ同じ意味を表す熟語を、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | |
|------|----|--------------------------|----|
| X Ⅱ | 14 | Y Ⅱ | 15 |
| 1 不和 | | 2 杞憂 <small>きゆう</small> | |
| | | 3 狡猾 <small>こうかく</small> | |
| | | 4 動揺 | |
| | | 5 諦観 | |
| | | 6 足枷 <small>あしかせ</small> | |

問(七) 空欄 甲 丙 を補うのにふさわしい四字熟語を、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | | |
|--------|----|--------|----|--------|----|
| 甲 Ⅱ | 16 | 乙 Ⅱ | 17 | 丙 Ⅱ | 18 |
| 1 千差万別 | | 2 表裏一体 | | 3 一挙一動 | |
| | | | | 4 因果応報 | |
| 5 孤立無援 | | 6 一触即発 | | 7 朝三暮四 | |
| | | | | 8 呉越同舟 | |

問(八) 傍線部(3)「人間関係が自由化してくると、関係に対する満足度は上昇してくる」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 19
- 1 人間関係が自由化してくると、制度的な共同体に基づく人間関係に回帰できるから。
 - 2 人間関係が自由化してくると、共同体の抑圧力の強さをむしろ求めるようになるから。
 - 3 人間関係が自由化してくると、かつての豊かで良き人間関係を築くことができるから。
 - 4 人間関係が自由化してくると、わずらわしい人間関係から逃れて一人になれるから。
 - 5 人間関係が自由化してくると、主体的に人間関係を築くことができるようになるから。

問(九) 本文の内容と合致するものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 20
- 1 一九七〇年代以降、人びとの価値観の多様化は共同体の弱体化と、人口移動率の大幅な増加をもたらした。
 - 2 映画『ALWAYS』に描かれた時代は、現代人が考えるほど理想的な人間関係が存在していたわけではない。
 - 3 内閣府の調査によれば、現代の若者は制度的な共同体よりも友人関係のような共同体に愛着を抱く傾向がある。
 - 4 映画『ALWAYS』に描かれた時代と違い、今日の若者は地縁や血縁といった濃密な人間関係を欲している。
 - 5 戦後の日本で殺人事件がもっとも多かった一九六〇年前後の時期は、人間関係が非常に希薄な時代であった。

2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい

かなり前から、ラテン・アメリカの世界で「マジック・リアリズム」と呼ばれる、その風土に昔から生きつづけた神話的想像力と近代の小説とを結び合わせた不思議な小説が出現しはじめて、日本の読者をも魅了した^a。つづけて、カリブ海の島々から、土地の言葉と植民宗主国のフランス語がこたまぜになった、今まではいかにも教養のない、出来損ないの言葉だとされてきた言葉を小説に活かして、その風土の想像力を描く「クレオール文学」と呼ばれる小説も現れはじめた。ほかに、それぞれの風土の時間を近代の時計からはずして、神話的な時間に読み替えていこうとする試みは、世界中ではじまっている。

こうした流れを一言で言えば、近代が見失ってきたものをなんとか取り戻したいという人間たちの欲求なのにちがいない。そこにはもう一つ、近代の学問がとんでもない古代の口承文学の世界を見事に読み解いてくれたという「大発見」も手伝っているのかもしれない。その成果を考えると、⁽¹⁾私はいやでも複雑な思いにならずにいらなくなる。

本来、口承の物語の世界は地縁、血縁のなかで生きてきたもので、だからこそ、外の世界の物語を知る機会には恵まれなかった。自分たちの物語は書き言葉で記録しないことが前提になっているので、その場だけの楽しみとして存在していて、それが繰り返されるうち、言葉は自然に変わっていく。物語の筋も変わっていく。

物語は地縁、血縁に固定、あるいは共有されている代わりに、その内容は固定されないものとして存在する。作者というものが存在しないし、（イ）、著作権などというものもない。いくらでも変更可能な、^b即興的なものなのだ。

そのために、⁽²⁾逆説になるけれども、物語は現実には流れるものとして存在していて、思いがけない遠い地域で共通の物語が語られていることに、私たちはびつくりさせられることが多い。古代メソポタミアの話が日本の神話に通じていることだって、考えられないことではない。（ロ）、中央アジアの話に、日本の説話と通じるものがたくさんあるのは、別に意外なことではないのだ。

物語はしかし、その場では、一回ごとに消え去っていくものでもある。声としては消えて、人々の想像力の中に生きつづける。

（ハ）現在の私たちにはどうしたって、『平家物語』のような昔の語り物の世界を昔の人たち同様には経験できない。『^{せつぎょうふがし}説経節』についても現在の私たちは活字で読むことができ、もちろん、それだけでも楽しいのだけれども、室町時代にはどのように実際に歌われていたのか、それはだれにもわからない。現在の「説経節」を聞いても、それはすでに「現在」のものに変わっているはずなのだ。その意味では、録音技術を持たなかった時代の音楽と似ている。そしてこの録音技術は、文学の場合で言えば、「書き記すこと」に当たる。

現在の私たちも好きな音楽をなんらかの方法で録音して、自分のものとして、いつでも好きなときに聞けるようにすることに^c。執着する。自分で所有したくなるのだ。それと同じように、昔の人たちも歌われている物語を文字で書き記し、それを自分の場所に保存することに、特別な執着を持っていただろうし、また、それは並はずれた富と権力の象徴にもなっていたと想像できる。「書く」ことは大変な修練と手間を必要とする特別な技術だった。言葉を声から文字に「変換」させることのできる書記は、国家機密にも関わる「最高位の魔法使い」の^Aようなものだったのかもしれない。

古代メソポタミアは小さな部族が^甲せめぎ合っていた世界だったので、基本的に多言語社会で、すでに辞書も作られていた。かの有名なクレオパトラは数種類の言語を自由にあやつる能力を持っていたので、政治的にも支配力を発揮できたという話がある。このクレオパトラがいたアレキサンドリアに壮大な図書館があったという事実はよく知られているが、もっと昔の、古代メソポタミアの時代から、図書館は各時代の王様によって作られていたらしい。今の私たちには「図書館」と聞いても、教養主義の、くすんだ場所だとしか感じられなくなっているが、その時代には、神々の声に通じる「物語」を文字という自分たちの発明した魔術的シンボルのなかに閉じこめたもの、つまり具体的には「粘土板」を納めた場所で、それは王権の象徴にもなっていただろうし、神の領域に近づく「神殿」のような、おごそかな、神秘的な場所だったにちがいない。

古代メソポタミアの叙事詩を今読むと、必ずと言っていいほど、それを書き記した「書記」の名前が出てくる。エジプト時代の粘土板によれば、王宮で働いていた書記の地位はかなり高いものだったらしい。王家直属の書記養成学校もあった。ラムセス二世が叙事詩が大好きな王様で、自分が戦^{いくさ}に出かけるとすぐに、詩人に命じて、自分が主人公の叙事詩を作らせ、書記に書き記させていたという。その時代、それはただの物好きということではなく、王として神権を確認するために必要な、最優先の手続きだったのかもしれない。

そして、そうした叙事詩は神々の声によって、人間の世界の事象が歌われている。人間の世界で起こることは、神々にしかその意味を理解することができない。神々が演じる「神聖劇」として、もともと、叙事詩はうたわれるようになった。それが次第に、王権の拡大と共に、王と神が重ね合わせられるようになり、一方では、人間と神の^d融合した「英雄」が誕生して、「英雄叙事詩」⁽³⁾がうたわれるようになる。私たちにとって耳に親しいアイヌの^(注2)ユカラの世界がそれに当たる。

ところで、私の^Bような^Z「一介の物書きでも、なんとなくこのようなことが類推できるようになっているのは、やはり今の時代に感謝するべきなのだろう、と思わずにいられない。

古代メソポタミアの粘土板が発見されて、それをねばり強く読み解いたひとがいて、(二)、それを日本語にまで翻訳してくれるひとがいたの^cで、現在私たちはごく手軽に、五千年前の叙事詩を読むことができるようになっていく。五千年前に生きていたら、当時の叙事詩を生^cの形で聞くことはできたかもしれないが、それがさらにエジプトを経て、旧約聖書、ホメロスに至り、また、中央アジアからシベリア、サハリン、北海道のアイ

ヌに至るまで、（ホ）中国、東南アジアの少数民族、太平洋のポリネシア、そして日本にまで至る「英雄叙事詩」の大きな流れを知ることには^e到底できなかったのだ。さまざまな場所の物語をひとつの場所にしながら、活字の形ではあるものの、とにかく知ることができるのは、やはり、古代の王様でもかなわなかった特権なのだろうと思う。

(4) 失うものがあれば、得るものもある。そう考えると、今の時代の特権であるさまざまな地域と時代の物語を読まずにいるのは、現代の人間としては、あまりに貧しい生き方だと言わなければならない。

（津島佑子『夢の歌から』株式会社インスクリプトによる）

（注1）説経節＝中世から近世にかけて行われた、宗教性と娯楽性をあわせもつ語り物。仏教の説教が平俗化し、節をつけて音楽的に語られるようになったもの。
（注2）ユカラ＝アイヌ民族に口承で伝わる叙事詩。

問(一) 傍線部a～eの漢字と同じ読みの漢字を含むものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

a	b	c	d	e
a 魅了 1	b 審美 2	c 器量 3	d 末端 4	e 犠牲 5
b 即興 1	推拳 2	早急 3	率先 4	説得 5
c 執着 1	渋滞 2	実直 3	供述 4	郷愁 5
d 融合 1	仲介 2	寛容 3	猶予 4	統一 5
e 到底 1	童心 2	搭乗 3	利発 4	夏至 5

問(二) 空欄（イ）（ホ）を補うのにふさわしい言葉を、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。（同じ番号を二度以上選

んではいけません。）

- 1 たとえ 2 まして 3 ところが 4 もちろん 5 さらに 6 あるいは

問(三) 傍線部(1)「私はいやでも複雑な思いにならずにいらなくなる」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 11

- 1 近代が捨て去ってしまった口承文学を再度見つけ出そうとするのは、現代人の身勝手さに他ならないから。
- 2 近代が見失ってしまった口承文学を取り戻すことができるのは、近代の学問の成果によってであるから。
- 3 新しい時代において役に立つはずの近代の学問が、古代の口承文学の研究において大きな発見をしたから。
- 4 科学的なものからは程遠いはずの古代の口承文学が、近代科学の学問的対象になってしまっているから。
- 5 古代の口承文学を学問的に理解しようとしても、現代人が当時の人々のように理解することは不可能であるから。

問(四) 傍線部(2)「逆説になるけれども」とありますが、何が「逆説」なのですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 12

- 1 世界各地でその地域独自の物語が生まれるが、それらは語り継がれていくうちに共通の内容を持つようになること
- 2 物語は一回限りのものであるのに、長い歴史を通して保存され続けていること
- 3 地縁、血縁に固定されたものである物語に、特定の作者が存在していないこと
- 4 古代に起源を持つにもかかわらず、現代においても通用するような物語が存在すること
- 5 物語の内容はいくらでも変更可能であるにもかかわらず、遠い地域で共通の物語が語られていること

問(五) 二重傍線部A・Bの「ような」の用法の説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。 13

- 1 AもBも比況（たとえ）を表す。
- 2 Aは比況を、Bは不確かな断定を表す。
- 3 Aは比況を、Bは例示を表す。
- 4 AもBも例示を表す。
- 5 Aは例示を、Bは不確かな断定を表す。

問(六) 傍線部甲「せめぎ合って」、乙「一介の」の意味としてふさわしいものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

甲 14 乙 15

甲「せめぎ合って」

- | | | | | |
|--------|-----------|----------|---------|-----------------------------------|
| 1 共存して | 2 ひしめきあつて | 3 互いに争って | 4 助けあつて | 5 共に切磋琢磨 <small>せつさたくま</small> して |
|--------|-----------|----------|---------|-----------------------------------|

乙「一介の」

- | | | | | |
|-------|--------|----------|----------|-----------|
| 1 無名の | 2 初心者の | 3 取り柄のない | 4 独り立ちした | 5 取るに足りない |
|-------|--------|----------|----------|-----------|

問(七) 傍線部(3)「英雄叙事詩」とありますが、その成立の過程を示したものとしてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

16

- | | | | | | | |
|--------------------|---|----------------|---|-------------|---|---------|
| 1 神々が人間の世界を歌う「神聖劇」 | ↓ | 王が神と同一視される | ↓ | 「英雄」の誕生 | ↓ | 「英雄叙事詩」 |
| 2 王の業績の記録 | ↓ | 神による人間界の解釈 | ↓ | 神々が演じる「神聖劇」 | ↓ | 「英雄叙事詩」 |
| 3 王の神権を確認する手続き | ↓ | 王と神とを同一視 | ↓ | 王と神との一体化 | ↓ | 「英雄叙事詩」 |
| 4 人間の世界を神の視点から解釈 | ↓ | 叙事詩として歌う | ↓ | 王として神権を確認 | ↓ | 「英雄叙事詩」 |
| 5 詩人に叙事詩を作らせる | ↓ | その内容を神々の声と解釈する | ↓ | 王権の拡大 | ↓ | 「英雄叙事詩」 |

問(八) 傍線部(4)「失うものがあれば、得るものもある」とありますが、それはどういうことですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

17

- | |
|--|
| 1 古代の叙事詩を解読して翻訳するには多大な苦労を要するが、おかげで私たちはそれを自国語で楽しむことができる。 |
| 2 あらゆる時代、あらゆる土地に存在していた無数の叙事詩や物語は、それらすべてが現在まで残っているわけではない。 |
| 3 古代の叙事詩を生で聞くことはできないが、文字で世界各地の様々な時代の物語を読みそれらの大きな流れを知ることができる。 |
| 4 古代の叙事詩が持っていたそれぞれに特有の意味はわからないが、世界的な視野でその位置づけを知ることができる。 |
| 5 活き活きとした神話の世界を叙事詩を通じて味わうことはできないが、翻訳された本によって手軽に物語の筋を楽しむことができる。 |

問
(九)

筆者の考えと合致するものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

18

- 1 録音技術がなかったゆえに、かつての人間はその場限りの物語や歌を集中して楽しむことができた。
- 2 様々な地域と時代の物語を読めるのは、古代の王様でも経験することができなかった現代人の特権であるが、生で聞くことにはかなわない。
- 3 歌や物語は古代には神々の視点で描かれたがゆえに、それらを文字で記録し所有することは富と権力の象徴となった。
- 4 現在私たちが「図書館」という言葉から受ける印象と、古代の王様によって作られた図書館が象徴するものとは異なっている。
- 5 古代メソポタミアでは王家直属の書記養成学校があり、書記の身分は詩人に次いで高いものであったと考えられる。

設問は以上です。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「聞き召す」ということがあります。これは、古代から使われている日本固有のやまとことばのひとつで、「お聞きになる」⁽¹⁾という意味のほか、食べることにも飲むことにも、たとえば「ご酒を聞き召す」などと使います。

ふしぎに思うかもしれませんが、人間の非常に重要な基本的行動を「きく」と表現しているのです。

さらに、「聞き召す」には天皇が「統治する、治める」という意味もあります。統治者の行動の基本は聞くことなのです。見ることも、しゃべることでも、フル^aれることでもない。人々の話をよく聞ける人間にこそ、長つまり責任者としてのシ カク^bがあるのです。

たとえば、部下の話をよく聞ける社長が良い社長であり、子どもの言い分をよく聞ける親は良い親です。聞くということは、人間の 器⁽²⁾としての価値基準でもあるわけです。

では、「きく」と「みる」はどう違うかというと、「みる」とはアクティブな認識です。「きく」はパッシブ、受動的であり、耳は受容する器官です。また、「きく」ということは有事の 仕業⁽³⁾ではなくて、平事、平和な時の仕業です。戦いの最中に「物見」はしても「物聞」はしてられません。それだけに本質的だし、奥行きが深い。だからこそ、尊重しなければいけない高い精神性も持っているわけです。

たとえば、聖徳太子は十人の ウツタエ^cを一度に聞いた。だから彼は聖者なのです。聖者とは、聞く耳を持っている人のことであり、相手のいつていることをまず受け取って、それから判断する。思想家とか哲学者は、皆よく聞く人です。見る人でもなく、しゃべる人でもありません。

受容する、それがものの判断の原型であって、声高であつたり精神がコウ ヨウ^dしては冷静な思考ができません。座っていることと聞くことは、知者の最大の条件です。

このように、耳はとても大事な器官で、古代の人は耳を植物の「実」⁽⁴⁾になぞらえました。同様に鼻は「花」、目は「芽」、歯は「葉」です。芽は最初に確認するもの、花は一番先端にあるもの、葉は末端で伸びるものでしょう。

そして耳は入ってくるものを受け止め、その結実するものが果実であるという考えなのです。見て認識されるものよりも、聞こえてくるものの方が大事だと考えたのです。

これは、日本だけではなくて人類に共通した考え方で、たとえば person ということばのよとの意味は「音によって」とか「音を通して」です。つまり、人格とはその人がどのような音をたてているかによって決まる。人格は響きなのです。その人から何か響いてくるものがあれば、その人は素晴らしいパーソナリティを持っているということになるし、そのパーソナリティを受け止めるのも耳なのです。

さて、わたしたちが現在使っている日本語では、「きく」ということばに聞・聴・効・利などの漢字をあてて、それぞれ異なる意味があるかのように使い分けています。しかし、やまとことばを用いた古代の人々は、「きく」というひとつのことばにすべてをこめていました。たとえば、「腕利きの刑事」の「きく」は俊敏で犯人を捕えるすぐれた能力があることですが、「薬が効く」の「きく」は病を治す力のあることでしょう。

つまりやまとことばでは、「きく」ということばに、ものの本質をとらえる能力がある、⁽⁵⁾ 抽象化して表していたのです。

どんな漢字をあてても、やまとことばとして同じものは、そもそものことばが持っている働きは同じです。古代の人びとはそのことを知っていたのですが、漢字が入ってきたことで、ものによって聞・効・利などと表現を区別するようになりました。

どうもわれわれ現代人における知識のタイ^e、ケイは区別・分類することと考えがちですが、全体を統合してこそものの姿が活きてくる。そういう総合することこそ、これからもっとも必要になると思います。

その意味では、古代の人びとの方が、細分化されていない体験を重んじ、見たり聞いたりしたものを総合的な情報として判断を下していたと思います。その中から生まれた抽象的だが深みのあるやまとことばを理解することは、わたしたちが幸せに生きる一助となるのかもしれない。

幸せは昔、「さきわい」といいました。体の中に花が咲くということです。頭だけでなく、全身を使った感性でわくわくするような自分の花を咲かせる——これからは、こうした感性が大事でしょう。

(中西進『日本人の愛したことば』東京書籍による)

問(一) 傍線部 a～e のカタカナにあたる漢字と同じ漢字を含むものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

a || 1 b || 2 c || 3 d || 4 e || 5

- a フ | れる
- | | | | | |
|----------|--------|---------|----------|-----------|
| 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 食欲が増進する。 | 囑託で働く。 | 触手を伸ばす。 | 部屋を装飾する。 | ウナギを養殖する。 |

e

タイ
ケイ

- 1 敬称を付けて呼ぶ。
- 2 拝啓で始まる手紙。
- 3 東京を経由する。
- 4 同じ系列の会社。
- 5 契約のサインをする。

d

コウ
ヨウ

- 1 新人を登用する。
- 2 声に抑揚がない。
- 3 仲間を擁護する。
- 4 指導員を養成する。
- 5 舞踊を習う。

c

ウツ
タエ

- 1 友だちと疎遠になる。
- 2 質素に暮らす。
- 3 侵入を阻止する。
- 4 祖国を思う。
- 5 訴訟を起こす。

b

シカ
ク

- 1 破格の待遇。
- 2 間隔をあけて並ぶ。
- 3 学界で頭角を現わす。
- 4 威嚇に屈しない。
- 5 秋の収穫。

問(二) 傍線部(1)「お聞きになる」と敬語の種類が同じものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 6

- 1 いただく
- 2 お目にかかる
- 3 うかがう
- 4 拝見する
- 5 いらっしゃる

問(三) 傍線部(2)「器」の本文中の意味としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 7

- 1 身分
- 2 性格
- 3 体格
- 4 度量
- 5 評判

問(四) 傍線部(3)「仕業」と熟語の読み方(漢字の音読み・訓読みの組み合わせ方)が同じものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

8

- 1 本棚
- 2 相性
- 3 布団
- 4 山桜
- 5 階段

問(五) 傍線部(4)「なぞらえ(なぞらえる)」の言い換えとしてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 9

- 1 帰する
- 2 解する
- 3 託する
- 4 略する
- 5 擬する

問(六) 傍線部(5)「抽象化」の説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 10

- 1 二つの事物が似ていることに基づいて、一方から他方を推し量る方法
- 2 一般的な法則に個々の具体的な事物を当てはめて結論を導く方法
- 3 具体的な考察対象から共通な要素や性質を抜き出し一般的な概念としてとらえる方法
- 4 難しくて具体性に欠ける事柄を分かりやすい言葉で説明する方法
- 5 個々の具体的な事物の違いに折りあいをつけ、何らかの妥協点を見つけ出す方法

2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(A) (E) の記号は段落を表します。

あるギャラリーの民藝展^{げい}で、テーブルの上に置かれた竹籠^{かご}のひとつに目が留まった。竹ひごを斜めに巻いた縁^{ふち}は、木に蔓^{つる}が巻き付いた様子をおぼえて、総じて凝った意匠^aはないものの、一切、手抜きが見当たらなかった。ごく普通のなりは、ひとりでに編み上がったというような淡々とした顔つきをしており、作り手の痕跡^{えん}を感じさせなかった。(1)

そんなものを見てしまったのは、是が非でも欲しくなるのは当然で、すぐさま財布をポケットから取り出す。と同時になんともムカつく気分が襲われた。なぜ「欲しい」という思いが「買う」という行為にただちに結びついてしまうのか。(2)

かつての暮らしには欠かせなかったであろう竹籠は、いまどきの都会暮らしに登場する出番などありはしない。(イ)、果実や野菜を放り込み、無造作を装って部屋に置けば、⁽¹⁾ちよつとしたインテリアにはなるだろう。生活の実用には結びつかなくとも、おしゃれなライフスタイルを演出することは造作もなくできる。ただ「すてきだから買う」ばかりで、「すてきだから作ろう」とは決してならない。自分の手は何も作り出すことがないのだ。

(A) 手ずからものを作り出すことに憧^{あこが}れている。とはいえ、私の手首はひどく硬く、指の動きも滑らかではない。手仕事にはあまりに不向きだ。細やかな作業をしようにも、⁽²⁾針に糸を通すくらいが()。固く締まった瓶の蓋を開ける、雑巾をきつく絞るといった、大雑把に力を出す分には長^たけている。

日々を振り返ると、手の登場する出番でもっとも多いのは、キーボードを叩^{たた}くかスマートフォンを握るかするときだ。そこではしなやかさや慎重さ、繊細さは必要とされない。手は、目で情報を追ひ、脳でそれ処理する際の補助としての役割しか果たしていない。気がつけば、手は目と頭に組みしかれてしまっており、そのことを特段不思議にも思わなくなっている。(3)

ギャラリーに赴いた数日後、鑿^{のみ}と木槌^{づち}を使って皿を作る機会を得た。そこで気づいたのは、手は目や頭に従属しておらず、まして手仕事とは⁽³⁾手による思考とそれがもたらす知恵がないと成立しないということだった。(4)

鑿も木槌も一度手にしたことがあっただけで、まともに扱えるとは言えない。まるで自信がなかった。握った時、最初に脳^b裏に浮かんできたのは、「きちんとした鑿と木槌の持ち方」についてのイメージと、その像に「鑿の刃先を木にしっかり当て、木槌を正しく持ちましょう」といった、ナレーションのようにかぶさる取り扱い説明の言葉だった。いったい何をどうすれば「しっかり」と「きちんと」になるのか知るはずもないのに、なんとか言葉によって安心しようとする自分がいた。

このように困惑して「どうすればいいのだったか」とあれこれ思う時、目は宙空を向くか、あるいはキョロキョロと左右に動く。誰しも馴染みのある、「えーっと」と思いあぐねる際のポーズだ。

[B] 目の前に木と鑿と木槌という極めて具体的なものがありながら、いまここではない過去に成功例はなかったかと頭の中で検索に励む。それがダメなら、この先に思いをはせ、「どうすればうまくいくか」と考える。そのとき、身体もまたそのような困惑した「表情」を浮かべるのだ。(5)

[C] ほとんど経験のないことだから過去を探しても仕方ないにもかかわらず、正解を参照し、なんとか言葉にして捉えようとする。そのとき脳は激しく動くかもしれないが、手は止まったままだ。皿を作ることが置き去りにされ、言葉が生み出す現実感の方を重んじるあまり、現実に対処することを忘れてしまう。

(口)、とりあえず動いてみるのではなくモデルを見つけ、それを身につけるにはどうすればいいかを熱心に考える。

「はつきり言って病だよ」と私が自分に告げる声が聞こえる。その声は、「やったことがないから自信がない。だからできない」と自動的に判断してしまうことには悪魔的な魅力があるのだと教えてくれる。

「やったことがない・自信がない・できない」はそれぞれ別のことだ。だが、それぞれを「だから」で繋げてしまい、できない理由を自らに説明するのは上手になっても、「まず手を動かす」という誰でもできるはずの簡単なことを忘れてしまう。

手に感じる鑿と木槌の確かな重さは、様々なことを教えてくれる。「やったことがないから自信がない」という考えは思い込みで、自分を行き止まりに追い込んでいるに過ぎなかった。その先には「だったらやってみればいい」という道が続いており、「ただやってみる」とき、うまくやる必要も正しくやる必要もまったくないのだとわかる。

[D] 作業を始めてしばらくすると、鑿を握る左手が痺れ、木槌を握る人差し指の付け根に早くも水ぶくれができた。しっかりと握ることとぎゅっと力を入れてしまうことの違いが、まるでわかっていないのだ。

どうということのない所作^c。たとえば料理をするときからして、⁽⁴⁾ そうなのだ。食材を切るときは、手からすり抜け落ちない程度に包丁を柔らかく緩みなく握って、あとは引くか押すかすればいい。ところが、私は手に包丁を押し付けるようにして握り込んでしまうため、スパッと切ることもできないし、トントンと流れに乗った小気味よい音をまな板が立てることはない。そんな調子ではすぐに疲れることはわかっているため、「力を入れな

いでおこう」と言い聞かせ、慎重に臨む。(ハ) 今度は「力を入れない持ち方」をしようとしてしまい、手元がおぼつかなくなる。気がつけば、菜や肉を切るために費やすべきエネルギーが、包丁の持ち方に迷うことに注がれているのだ。「うまい切り方」を考えて、それを実行しようとしている。傍からはとりわけ変には見えないかも知れないが、実は調理に似た、⁽⁵⁾ 概念的な行為をしているだけなのだ。

いつもなら、うまくやろうとしてへとへとに疲れて終わりを迎える。しかし、その日は違った。ぐっと力が入ってしまうから手は次第に引き攣れてはきたが、ただ彫るという原始的な行為に喜びと楽しさを感じて、あれこれ思う暇も惜しいくらい、ひたすら彫ることに集中した。うまく手が動かないことをさほどの障害とみなさなくなっていた。

[E] 彫り進めるたびに楠くすのきの良い香りが(6)鼻孔を（ ）。(6)鑿が穿うった溝を指先でなぞれば、次にどう進めばいいかわかった。誰かの作った皿や手つきから学ぶのではなく、自分の彫ったものがどこをどのように削ればいいか教えてくれた。考えずとも自おのずとわかる。自らの振る舞いからするべきこと、向かう先を教えられる。これは発見だった。

そこには正解を求めようとする時の抜かりなく周囲を見遣ったりする様子や、「ちゃんとしないと怒られてしまう」という子供の頃から培ってきた怖れや、物事に対していつも受け身でいようとする態度はなかった。

いつの間にか私は、正しさは私の内にはなく、外にあると思い込んでいたらしい。それは謙虚さから来ているのではない。自分でやってみることを恐れるが故の態度なのだ。恐怖を克服しようすると、逆に恐怖を増幅させてしまう。恐怖に(注)フォーカスするのではなく、(7)ただやってみればよかったのだ。

(二)、「これでいいのだろうか」と不安が心に兆きざす。その綻びを目ざとく見つけ、言葉はいつも「そんなことでは評価されないぞ」と私を脅し、他人の模倣dを勧めてくる。その声に素直に従っても、うまくいった試しがない。私が自分の手を誰かの指示してくれた通りに動かそうとするといふ、とても複雑なことをしている限り、うまくいくはずはないからだ。

(尹雄大『協道にそれる―〈正しさ〉を手放すということ』春秋社による)

(注) フォーカスする＝焦点を当てる。

問(一) 傍線部 a～d の漢字と同じ読みをする漢字を含むものを、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

	a =	b =	c =	d =
	1	2	3	4
a	意匠	吐露	雑木	3 崇敬
b	脳裏	網羅	履行	3 漸次
c	所作	1 詐取	2 酢酸	3 即座
				4 湯治
				5 短冊

び、その番号をマークしなさい。 12

- 1 包丁は緩みなく握らなければならないということ
- 2 包丁を適切に握ることができないということ
- 3 作業中すぐに疲れを感じてしまうということ
- 4 食材をきれいに切ることができないということ
- 5 精神的な安定が保てなくなること

問(七) 傍線部(5)「概念的な行為」とありますが、どのような行為を言うのですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 13

- 1 何かを創造するために欠かせない重要な行為
- 2 一見それらしく見えるように装われた行為
- 3 現実には実現できないような空想的な行為
- 4 技術的により一層の向上を図ろうとする行為
- 5 頭で考えてそれを現実化しようとする行為

問(八) 傍線部(6)「鼻孔を()」の空欄()に入る言葉としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

14

- 1 さえぎる
- 2 えぐる
- 3 いやす
- 4 くすぐる
- 5 そそる

問(九) 傍線部(7)「ただやってみればよかった」とありますが、筆者は何を悔やんでいるのですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 15

- 1 子供の頃から引つ込み思案で、積極的に行動して来なかったこと
- 2 正解を言葉に求め、とりあえず動いてみようとしなかったこと

- 3 正しさは自分の内にはないと、謙虚に思い続けていたこと
- 4 彫り始める前に、思わず困惑の表情を浮かべてしまったこと
- 5 鑿と木槌の正しい使い方を、前もって頭に詰め込みすぎたこと

問(十)

本文から次の文が脱落しています。本文中の(1)～(5)のどこに戻すのが適切ですか。後群のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

16

そんな自分をひどく浅ましく感じた。

- 1 (1)
- 2 (2)
- 3 (3)
- 4 (4)
- 5 (5)

問(十一)

本文の内容と合致するものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

17

- 1 何かに取り組む時にはいきなり始めるのではなく、過去の成功例を参照するのがよい。
- 2 いつもなら疲れて終わるだけなのに、木の皿づくりに関しては最初からうまくいった。
- 3 鑿や木槌を扱う時は手がうまく動かないが、料理の時はそのようなことはない。
- 4 鑿と木槌を使って皿を作るという作業を行うとき、言葉による説明は必要ない。
- 5 スマートフォンを握ったりキーボードを叩いたりなど、普段から手は主役である。

3

次の各問いに答えなさい。

問(一)

「因果」と熟語の構成が同じものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

1

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 1 乗車 | 2 有志 | 3 損得 | 4 悲哀 | 5 自説 |
|------|------|------|------|------|

問(二)

次の漢字の読みが間違っているものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

2

- | | | | | |
|-----------|-------------|-----------|--------------|-----------|
| 1 滞る(おびる) | 2 溺れる(おぼれる) | 3 悟る(さとる) | 4 虐げる(しいたげる) | 5 呪う(のろう) |
|-----------|-------------|-----------|--------------|-----------|

問(三)

次の漢字の部首名が間違っているものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

3

- | | | | | |
|------------|------------|-----------|-----------|------------|
| 1 陰(こざとへん) | 2 疾(やまいだれ) | 3 肺(にくづき) | 4 削(りつとう) | 5 窓(うかんむり) |
|------------|------------|-----------|-----------|------------|

問(四)

「殊勝」の意味としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

4

- | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1 特殊なこと | 2 感心なこと | 3 幸福なこと | 4 残念なこと | 5 痛快なこと |
|---------|---------|---------|---------|---------|

問(五)

「膝が笑う」を用いた短文としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

5

- 1 老母危篤の知らせに膝が笑う。
- 2 長い階段を上り下りして膝が笑う。
- 3 面白い落語を聞いて膝が笑う。
- 4 人前で恥をかって膝が笑う。
- 5 そんなことで落ちこむとは膝が笑う。

問(六)

次の四字熟語の漢字が間違っているものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

6

- 1 付和雷同
- 2 五里霧中
- 3 疑心暗記
- 4 一期一会
- 5 言語道断

問(七)

次のことわざの空欄 に入る語を、後群のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

7

来年のことを言くと鬼が 。

- 1 泣く
- 2 来る
- 3 聞く
- 4 勝つ
- 5 笑う

問(八)

「パラドックス」の意味としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

8

- 1 迷路
- 2 平行
- 3 逆説
- 4 文脈
- 5 論理

問(九)

次の文はいくつの文節から成りますか。ふさわしいものを、後群のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

9

友だちが約束した時間に来ないので、電話をしたけれど、出なかった。

- 1 5つ
- 2 6つ
- 3 7つ
- 4 8つ
- 5 9つ

問(十) 次の故事成語の空欄□を補うのにふさわしい漢字一字を、後群のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

門前の虎 後門の□

- 1 熊
- 2 竜
- 3 狐
- 4 狼
- 5 猫

問(十一) 季語とその季節の組合せとしてふさわしくないものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 余寒(春)
- 2 残暑(秋)
- 3 梅の花(夏)
- 4 小春(冬)
- 5 麦の秋(夏)

問(十二) 作品とその作者の組合せとしてふさわしくないものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 暗夜行路(谷崎潤一郎)
- 2 羅生門(芥川龍之介)
- 3 伊豆の踊子(川端康成)
- 4 山椒魚(井伏鱒二)
- 5 浮雲(二葉亭四迷)

設問は以上です。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

長い出張から久しぶりに京都に戻った。つい数時間前まで椰子の木が立ち並ぶ日南の海岸沿いを車で走りながら、宮崎の雄大な自然を前にして⁽¹⁾息をのんでいたのだった。そのすべても、いまは遠い記憶の彼方だ。雨の降る東山の麓には、ただ蛙の鳴く声だけがする。疏水の上を、蜩が一匹飛んでいる。

家に着くと、とつくに眠ったはずの息子を起こさないよう、僕は慎重に玄関の戸を開いた。腕には、宮崎の高校生たちにもらった大きな花束がある。百合の甘い香りが室内に広がる。今日は、宮崎の高校で講演をしたのだ。玄関の明かりを消したまま、音を立てないよう手探りで戸の鍵をそつと閉める。

そこに、⁽²⁾ たったたったたつ、と元気のいい足音がした。布団を飛び出し、息子が玄関に駆けてきた。十一時近くだというのに、まだ起きていたみたいだ。花束を抱えた僕を見上げ、「おとーさん、じょーずにおはな、とつてきた!」と、目を丸くしながら彼は叫んだ。口調が、⁽³⁾ 最後に聞いたときより随分大人びている。二歳三カ月になった息子と、六日ぶりの再会である。

^(注) 白川静の『文字講話Ⅰ』によれば、「かぞへる」という言葉はもともと「か+そへる」で、一日ずつ、^{ふつか} 二日、^{みっか} 三日と、過ぎ去った日に「か」の音を「そえ」ていくことに由来するらしい。楽しみな日待ち^a 焦がれながらかぞえる。過ぎ去った日の記憶を反芻^{はんろう}しながら、姿なき時の流れに一つずつ「か」をそえていく。(イ) 古代の人たちは、茫漠とした時間の流れに、形を与えようとしたのだろうか。

息子が一歳半を過ぎた頃から、二人で風呂で、一緒に数を数えるようになった。肩まで湯に浸かり、声を合わせて「いち、に、さん、し、ご、ろく、なな、はち、きゅう、じゅう!」と唱える。(ロ) 彼は、まだ数の概念を理解してはいない。

先日朝ごはんに並んだパンケーキを指して「何枚ある?」と聞いてみた。息子は、五枚しかないパンケーキを指差しながら「いち、に、さん、し、ご、ろく、なな!」と、自信満々に「数えて」みせた。

出張に出る前、僕は息子に、「来週帰ってくるからね。今回は長めの留守番になるよ」と伝えた。そのとき息子は、少し考えるようなそぶりをしたあと、「おとーさん、いいこにしててね!」と、僕を明るく見送ってくれた。六日ぶりに息子を抱き上げ、「あれから毎日、この日を楽しみに⁽⁴⁾かぞえていたよ」と、僕は心の中で言った。

数えることのできない息子に、世界はいまどう見えているだろうか。おやつ時間に食べるクッキーの数を、いつもより一枚だけ減らしてみたとき、彼はそれに気づく様子もなく、ただ大切そうに一枚ずつ、いつものように夢中になって食べていた。寝る前、「今日は何して遊んだ?」と聞いて

も、彼は平気で昨日や一昨日のことを言う。彼は、自分の生きる時間にかをそえることをまだ知らないのである。数で分節される前の世界を、彼は僕よりはるかに「いま、ここ」に集中しながら生きている。

数には、人の心の向きをそろえる働きがある。「六日後に会おう」と約束すれば、まだ来ぬ時間に向かつて心が揃う。⁽⁵⁾「右から二本目の椰子の木」と言えば、会話している二人の注意が、同じ木の方へ揃う。数は世界を切り分け、その切り分け方に応じて、人の心の向きを揃えていくのだ。

子どもは数を覚える前から、人と心が揃う喜びを知る。息子がしたがる遊びの多くは、ただ純粹にこの喜びを味わう遊戯だ。

僕がシャワーを浴びているとよく、息子が浴室のガラス戸の向こうから「たっち！」と、手のひらを戸に当ててくる。曇りガラスの向こうに、小さな手のひらがうつすらと浮かぶ。僕も「たっち！」と言って、ガラスの反対側から彼の手の上に自分の手を重ねる。今度は、彼が足の裏を「たっち！」と言ってガラス戸にくっつけてくる。僕もすかさず「たっち！」と同じ場所に足を当てる。延々とこのくり返しである。⁽⁶⁾手でタッチされたら、手で返す。足でタッチされたら、足で返す。二人のあいだにルールが生まれ、彼はそのルールに気づき、それを分かち合うことを楽しんでいる。

人は他者と共鳴し、共感しながら、社会を生きる存在である。人の振る舞いを予測し、予測されながらやりとりするうちに、自然とそこにルールが生まれる。人と会ったらあいさつをする。食事が終わるとごちそうさまという。すべては、時代や場所によって移り変わるルールだ。^(b)明文化された法律だけでなく、私たちは他者とのやりとりを通して生成するルールに気づき、それに従い、ときにはそこからあえて逸脱しながら生きている。

息子はまだ数の意味を理解していないが、（ハ）数を身につけ、「計算」することだって覚えていくだろう。計算するには、ルールを理解し、それを正確に守る必要がある。何気ない遊びのなかで、そのための準備はすでに始まっているのだ。

全国各地で子どもたちに向けて講演するとき、僕は彼らの潑刺^{はつらつ}としたエネルギーに力をもらうと同時に、明るい希望だけを語るこのできない自分⁽⁷⁾に、もどかしさを感じる。彼らが子や孫を持つ頃、世界はどう変わっているだろうか。（ニ）平和で安全な暮らしができるだろうか。僕には正直、まったく予測がつかないのである。

人と人のやりとりからルールが生まれる。そのルール自体が、時代の変化とともに変容していく。それまで当たり前と思われていたことが、時代の移り変わりとともに崩れ去っていくこともある。

教育や医療、環境や経済、政治やメディアなど、いまあらゆるところで、既存の制度が壊れつつある。これからは与えられたルールに適應するだけでなく、新しいルールが^d生成していく場面に、参加していく力が求められるだろう。

数を覚え、計算を学び、ルールに従って記号を操作していく。それももちろん大切なことだが、（ホ）ルールがどこから生まれ、何を目指して共有されているのか、そのことを自覚できなくなつては元も子もない。

- 2 息をひそめてまわりを眺める様子
- 3 圧倒されて息苦しくなる様子
- 4 感動で思わず息が止まる様子
- 5 冷静になろうと息を整える様子

問(四) 傍線部(2)「たつたつたつたつ」のような言葉を何と言いますか。ふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 オノマトペ
- 2 リフレイン
- 3 パロディー
- 4 パラフレーズ
- 5 メタファー

11

問(五) 傍線部(3)「最後に聞いたとき」の子どもの様子の説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 父親の言葉の意味をかみしめながら、分別のある態度で父親を送り出した。
- 2 父親の言葉の意味を子どもなりに理解して、子どもらしい無邪気な言葉を口にした。
- 3 別れを惜しむ父親とは対照的に、その場の状況を理解せず陽気にはしゃいでいた。
- 4 父親が家を離れることを心配しながらも、それをそぶりに出さないようにしていた。
- 5 父親と会えなくなることをひどく悲しみ、慰めの言葉にも耳を貸そうとしなかった。

12

問(六) 傍線部(4)「かぞえていた」とありますが、どういう事が言いたいのですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

13

- 1 毎日同じ事をしていうちに、「か」をそえることが癖になってしまった。
- 2 家に帰ってきて、「か」をそえる楽しみがなくなってしまった。
- 3 再会の日がなかなか来ず、「か」をそえることが苦痛になっていた。
- 4 再会の日を間違えないように、「か」をそえながら正確に数えていた。
- 5 一日一日「か」をそえながら、再会の日が来るのを待っていた。

問(七) 傍線部(5)「数は世界を切り分け」とありますが、「切り分ける」と同じ意味を表わす言葉としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 14

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | 操作する | 2 | 分節する | 3 | 生成する | 4 | 予測する | 5 | 解放する |
|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|

問(八) 傍線部(6)「このくり返し」の持つ意味合いについて、本文ではどのように述べていますか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 15

- 1 子どもに一定のルールを修得させるには、同じ行為を何度も繰り返すことが必要である。
- 2 子どもと意思疎通を図るには、ルールが単純な遊びの方がよい。
- 3 「たっち！」を繰り返すうちに、自然と親子の情愛がよみがえってくる。
- 4 「たっち！」のやりとりを通して、ルールを共有し分かち合う喜びが生まれる。
- 5 単なる同じ動作のくり返しであっても、子どもには十分楽しい遊びとなる。

問(九) 傍線部(7)「もどかしさ」を意味する言葉としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 16

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | 優柔不断 | 2 | 疑心暗鬼 | 3 | 周章狼狽 | 4 | 内憂外患 | 5 | 隔靴搔痒 |
|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|

問(十) 傍線部(8)「あの原風景を忘れずにいたい」とありますが、筆者は「原風景」をどのようなものとしてとらえていますか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 17

- 1 数と計算が行きわたった世界で人間らしくあるためには、遊びによるリラックスが必要だと気づかせてくれるもの
- 2 数に使われ想像力が縛りを受けている世界を離れ、ルール以前の状態に戻ることが人間性の回復につながることを悟らせてくれるもの
- 3 人間は他者と共鳴しながら生きる存在であり、ルールや制度も他者との関わりの中で生まれるものだと再確認させてくれるもの
- 4 人は本来無邪気な存在であり、だれもが幼いうちは、我を忘れて無心に遊ぶことができたということを思い出させてくれるもの
- 5 大きな曲がり角を迎えた現代社会で、与えられたルールに順応するだけでなく積極的に変えていくことの大切さを教えてくれるもの

問
(十一)

本文の内容と合致するものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

18

- 1 世界の先行きが見通せなくなり、ルールや制度に適応する力が必要とされている。
- 2 日常生活上のルールは、法律と違ってある程度柔軟に対応することが許される。
- 3 数には、相反する人の気持ちを一つの方向に向かわせる強制力がある。
- 4 茫漠とした時の流れに何らかの形を与えようとして、人は「かぞえて」きた。
- 5 息子がなかなか数えることを覚えないので、風呂で一緒に数の練習をするようになった。

2

次の各問いに答えなさい。

問(一)

次の傍線部のカタカナにあたる漢字と同じ漢字を含むものを、後群のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

1

事件のカクシンをつかむ。

1 うわさがカク散する。

2 隣国でカク命が起きる。

3 敵を威カクする。

4 組織の中カクをになう。

5 カク僚を任命する。

問(二)

次の傍線部のカタカナにあたる漢字と同じ漢字を含むものを、後群のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

2

ボランティをツノる。

1 家計ボをつける。

2 懸賞に応ボする。

3 ボ系社会の国。

4 ボ穴を掘る。

5 同級生を思ボする。

問(三)

漢字の読みが正しくないものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

3

1 遺憾(いかん)

2 懸念(けねん)

- 3 看過（かんか）
- 4 更迭（こうてつ）
- 5 緩衝（かんこう）

問(四) 漢字の画数が正しくないものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 患（11画）
- 2 為（9画）
- 3 遺（15画）
- 4 強（11画）
- 5 喪（13画）

問(五) 次の文のカタカナにあたる熟語を、後群のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

外向的な姉と内向的な弟はタイショウ的な性格だ。

- 1 大将
- 2 対象
- 3 対照
- 4 隊商
- 5 対称

問(六) 次のことわざと意味の最も近い四字熟語を、後群のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

身から出た錆

- 1 自縄自縛
- 2 支離滅裂
- 3 一言居士
- 4 自業自得
- 5 粉骨碎身

問(七) ことわざの表現が正しくないものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 弘法も筆を選ばず
- 2 暖簾に腕押し
- 3 火中の栗を拾う
- 4 衣食足りて礼節を知る
- 5 蓼食う虫も好き好き

問(八) 次のうちから、意味が正しくないものを一つ選び、その番号をマークしなさい。

8

- 1 捕らぬ狸の皮算用（労せずして利益を得ること）
- 2 好事魔多し（よいことには、とかく邪魔が入りやすい）
- 3 塞翁が馬（人の幸不幸は予測がつかない）
- 4 老人の冷や水（老人が年不相応なことをする）
- 5 餅は餅屋（どんな分野にもそれぞれの専門家がいる）

問(九) 「老婆心」の意味としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

9

- 1 考え方が年寄りじみていること
- 2 必要以上におせっかいなこと
- 3 何が起こっても冷静でいること
- 4 身寄りがなくて孤独でいること
- 5 心がひどくひねくれていること

問(十) 次のうちから対義語としてふさわしくないものを一つ選び、その番号をマークしなさい。

10

- 1 閑散 ↔ 混雑
- 2 正統 ↔ 邪悪
- 3 独立 ↔ 従属
- 4 鶏口 ↔ 牛後
- 5 親密 ↔ 疎遠

問(十一) 副詞としての性質が他の四つとは異なるものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

11

- 1 おそらく
- 2 まったく
- 3 ほとんど
- 4 まるで
- 5 しばらく

問(三) 季語と季節の組合せが正しくないものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 12

- 1 小春(秋)
- 2 時雨(冬)
- 3 麦の秋(夏)
- 4 霞(春)
- 5 七夕(秋)

問(三) 作者と作品の組合せが正しくないものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 13

- 1 志賀直哉——『暗夜行路』
- 2 島崎藤村——『破戒』
- 3 樋口一葉——『にこりえ』
- 4 三島由紀夫——『細雪』
- 5 国木田独步——『武蔵野』

問(四) 次の文はいくつの単語から成りますか。後群のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 14

ダリアの花が真つ赤に咲いていた。

- 1 6 語
- 2 7 語
- 3 8 語
- 4 9 語
- 5 10 語

問(五) 謙譲語が使われている文を、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 15

- 1 ゆっくりお話をうかがいます。

- 2 岡本さま、こちらへどうぞ。
- 3 もうお休みになった方がいいでしょう。
- 4 お好きなだけどうぞ召し上がれ。
- 5 先生はすでに帰られました。

設問は以上です。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

商品が生まれる過程について、^{〔注1〕}マルクスは『資本論』で次のように述べています。

「商品交換は、共同体の終わるところに、すなわち、共同体が他の共同体または他の共同体の成員と接触する点に始まる。しかしながら、物はひとたび共同体の対外生活において商品となると、ただちに、また反作用をおよぼして、共同体の内部生活においても商品となる。」

ここでは「商品は、共同体の内部では発生しない」ということを言っています。

^{〔1〕}なぜでしょうか。わかりやすい例は家族共同体でしょう。家族の中で物を売り買いすることはまずありません。あるとすれば、ちよつと変わった家族だけです。

『シートン動物記』で有名なイギリス生まれの博物学者アーネスト・トンブソン・シートンは、今の言葉で言えば^{〔注2〕}エコロジストの社会活動家でもありました。そのシートンが成人したとき、シートンの父が彼に、「お前を育て上げるためにこれだけの金がかかった」と言って、出産費用から食事代、学費まで、すべての領収書を見せ、「合計額はこうだ。これを支払え」と言ったそうです。

シートンは何年もかかってそれを支払い、そして父と絶縁したそうです。それはある意味、当然の結果でしょう。^{〔2〕}なぜか。

商品交換とそれ以外の交換（たとえば、贈与など）は何が違うのでしょうか。

商品交換はそれのみで完結します。「この商品の値段は一〇〇円です」「それをください」と一〇〇円玉を渡し、商品を受け取る。その後、売った人と買った人の間には何も **A** は残らない。これは一〇〇円を一〇〇万円に変えても同じです。

ある人が一〇〇万円の物を売り、別の人が買ったとしても、その二人の間に特別な縁が生じるわけではありません。売った人が、突然、買った人の家に行ってきた、「やあ、こんばんは。この前、一〇〇万円の高級時計をあなたが買ったときの店員です。ご飯を食べにきました」と言われたら、「えっ、何で？」という話になるわけです。

シートンの父は子供の養育にかかった費用と労力に対する支払いを求めた、つまり払われた努力を **B** として提示したわけです。言い換えれば、「これが支払われたら、俺とお前の間には何の関係もない」と宣言したので、シートンはそれに応えたのです。

一方、共同体世界の中では、富や労働の貸し借りが^aピンパンに行なわれ、それに伴って一緒に飯を食ったり、遊びに来たりといった付き合いも普通に行なわれます。富のやりとり、貸し借りと同時に人間的にも付き合いをする。経済的取引と人間的交際が^b渾然一体となっているわけです。

資本主義化の度合が高まってゆくことは、共同体的世界の領域が^cセバまってゆくことにほかなりません。それでも残っている共同体は **C** で

しょう。だから、さすがに子供に対して、「お前の養育にはこれだけかったのだから」と言って、子供にその金額を請求する⁽³⁾。シートンの父親のよ
うな人は滅多にいないし、そのような人物に対して私たちはほとんど本能的な嫌悪感を抱きます。

共同体の内部ではいろいろな貸し借りはあっても、商品は発生し得ない。「あの時手伝ってもらった」とか「あの時何かもらった」などという貸し
借りはいつか別な形で返すことが期待されているかもしれません。最終的には「お互い様」という形で清算されます。というか、「最終的」という瞬
間はないのです。なぜなら、「最終」とは縁が切れることを意味するでしょうから、その瞬間が来てはならないのです。

したがって「商品はどこで発生したのか」と考えると、もう一つ別な共同体を想定せざるを得ません。二つの共同体の間、そこで商品は発生してい
るのだということです。

ここでも商品という富の「形態」に着目するマルクスの見方が鮮やかに出ていますね。商品は、生産現場で生まれるのではないのです。もしそう
言ってしまうと、商品と富一般をごっちゃにすることになります。商品は、交換から、しかも共同体の外での交換からのみ生まれるのだというこ
と、これはマルクスの決定的な発見だったと言えます。

さて、商品交換のよいところは、後腐れがないということです。私たちは商品交換の場においては、「この人は困っているのかどうか」といった相
手の事情を、まったく気にしないでよいことになっている。それはザン^c、コク^cなことでもあるのですが、他方で、⁽⁴⁾商品はある意味で、人を自由にす
る作用を持っているのです。

それに比べると共同体内部のやりとりは、後腐れのかたまりです。「あいつは人からもらってばかりで、自分は何も人にあげない。返さない」とな
ると、悪評が立ってしまいます。

共同体は両義的な^Dで、一方では相互扶助の心温まる関係がある半面、相互監視の閉鎖空間でもあり、村の掟^{おきて}に違反すれば村八分になってし
まいます。^(注3)中島みゆきさんが歌ったところの、「薄情もんが田舎の町に　あと足で砂ばかりけるって言われてさ　出てくならお前の身内も住めんよ
うにしちやるって言われてさ」「ファイト！」というあの世界ですね。

これに対して、商品交換^d＝お金による交換の原理は「無縁」です。富が商品としてやりとりされる限りでは、それを売る側も買う側も相手の^E
を^dコリヨする必要がない。その取引においては、私たちは匿名の存在になります。だからこそ、自由なのです。

(中略)

こうして考えていくと、今日騒がれているキャッシュレス化がどれほど矛盾に満ちたものであるかがわかります。キャッシュレス化とは、お金の
やりとりをすべてコンピュータ上の電子データに置き換えていくことです。となるとお金のやりとりの記録が残ることになります。いくら個人情報

報保護がどうの、セキユリテイがどうのと言つても、そんなものは調べようと思えば調べられるに決まっています。

キャッシュレス化が進むということは、つまり、⁽⁵⁾「金を使う」ことから（ ）が消えることなのです。これは「商品の世界の中に入れば自由になれる」という資本主義の大原則が^eクズれるということです。

中国においてはすでにこのキャッシュレス化が政治的統制と結びつけて使われている、と言われています。中国の人たちもおそらく対策を考えながら使っているのだろとは思いますが、とにかく⁽⁶⁾キャッシュレス化というものが、資本主義の原理にとつて実はとんでもない出来事なのだという事実はここで指摘しておきたいと思います。

(白井聡『武器としての「資本論」』東洋経済新報社による)

(注1) マルクス＝カール・マルクス、一八一八～一八八三年。ドイツ出身の哲学者・経済学者・革命家。

(注2) エコロジスト＝生態学者。また自然環境保護主義者。

(注3) 中島みゆき＝一九五二年～。シンガーソングライター。

問(一) 傍線部a～eのカタカナにあたる漢字と同じ漢字を含むものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

a = 1 b = 2 c = 3 d = 4 e = 5

a ヒンパン

1 ハンロを開拓する。
2 ショハン本を買う。
3 モハンを示す。
4 商売がハンジョウする。
5 商品をハンニウする。

b セバまつて

1 キツキヨウを占う。
2 キヨウリヨクを惜しまない。
3 性格がヘンキヨウだ。
4 思わぬ事態にキヨウタンする。
5 どちらが速いかキヨウソウする。

c
ザンコク

- 1 冷房でコクシヨをしのぐ。
2 困難をコクフクする。
3 シンコクな相談。
4 コクモツを栽培する。
5 視察のホウコク。

d
コリヨ

- 1 ツヅミを打つ。
2 ホコらしげに語る。
3 従業員をやトウ。
4 往時をカエリみる。
5 花がカれる。

e
クズれる

- 1 ホウフな資源。
2 スイホウに帰す。
3 政権がホウカイする。
4 社会にホウシする。
5 生活様式をモホウする。

問(二)

空欄

A

く

E

を補うのにふさわしい言葉を、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二度以上選んでは

いけません。)

A 〓

6

B 〓

7

C 〓

8

D 〓

9

E 〓

10

1 存在

2 家族

3 自由

4 関係

5 商品

6 人生

問(三)

傍線部(1)「なぜでしょうか」とありますが、その理由について筆者はどのように考えていますか。その説明としてふさわしいものを、次のうち

から一つ選び、その番号をマークしなさい。

11

1 共同体の内部では富や労働の貸し借りは原則として行われないため、それらと同じ貸し借りである商品交換もそこで発生することはないから。

2 共同体の内部では、商品はお金ではなく物や労働と交換されるため、そこでは物々交換が発生しても商品交換が発生することはないから。

3 共同体の内部では商品交換よりもそれ以外の交換の方が主流となっているため、それに先立って商品交換が発生することはないから。

4 共同体の内部では経済的取引と人間的交際が不可分に結びついているため、経済的取引のみで成立する商品交換がそこで発生することはないから。

5 共同体の内部では一緒に食事をしたり遊んだりすることが普通に行われているため、経済的取引や商品交換がそこで発生することはないから。

問(四)

傍線部(2)「なぜか」とありますが、その理由について筆者はどのように考えていますか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

12

1 シートンは父親からの贈与関係を打ち切ったから。

2 シートンは父親との商品交換を終了したから。

3 シートンは父親に本能的な嫌悪感を抱いていたから。

4 シートンは父親との「お互い様」の関係を終えたから。

5 シートンは父親と後腐れがないようにしたかったから。

問(五)

傍線部(3)「シートンの父親のような人」の「ような」の用法としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

13

1 比喩

2 婉曲

3 推量

4 例示

5 願望

問(六)

傍線部(4)「商品はある意味で、人を自由にする」とはどういうことですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番

号をマークしなさい。 14

- 1 人は自分の所属する共同体から独立して、自由人として商品交換が行えるということ
- 2 人は商品交換を通じて、相互監視の閉鎖空間から抜け出すことができるということ
- 3 商品交換の場では当事者たちは個人として特定されないで済むということ
- 4 商品交換では買う側が納得する限りで自由に値段を決めることができるということ
- 5 商品交換の場は相互監視ではなく、相互扶助の関係で成立する空間であるということ

問(七) 傍線部(5)『金を使う』ことから () が消える」の空欄 () を補うのにふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマ

クしなさい。 15

- 1 匿名性
- 2 共同体
- 3 商品交換
- 4 人間的交際
- 5 政治的統制

問(八) 傍線部(6)「キャッシュレス化というものが、資本主義の原理にとって実はとんでもない出来事なのだ」とありますが、その理由の説明としてふ

さわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 16

- 1 キャッシュレス化は商品交換の場における自由を奪い取るから。
- 2 キャッシュレス化は商品交換する人々を政治的統制下に置くから。
- 3 キャッシュレス化は現金を媒介とした商品交換を排除するから。
- 4 キャッシュレス化は商品交換と人間的交際とを分離するから。
- 5 キャッシュレス化は共同体の間の商品交換を困難にするから。

問(九) 本文の内容と合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号をマークしなさい。(解答の順序は問いません。) 17・18

- 1 共同体の内部で商品交換が発生しなかったのは、それが相互監視の閉鎖空間だからである。
- 2 商品交換から最も縁遠い共同体は家族であるが、シートンの親子関係はその例外である。
- 3 キャッシュレス化が進んだのは、共同体の深部にまで資本主義化の度合が高まったからである。

- 4 私たちがシートンの父親に本能的な嫌悪感を抱くのは、彼がシートンを虐待したからである。
- 5 共同体の内部での貸し借りは、最終的には「お互い様」という形で解消され、縁が切れる。
- 6 キャッシュレス化では商品交換の記録が残ることになり、個人の自由が失われるという問題がある。

2

次の文章は、ある小説家が書いたエッセイの一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

一年前に事情^{わけ}あつて、両親に携帯電話を持たせることになったのだが、両親は一年経つても最低限の使い方しか出来ない。携帯電話なんて、分数の足し算もできなければ、be動詞の変化も覚えられないような子どもにも使いこなせるように作られているというのに……。 (イ)、両親の世代が経験してきた道具や機械と発想が根本的に違っているのだから、⁽¹⁾使えなくて当然だと思ふ。電卓のパネルの数字のキーはただ数字しか表わさないが、携帯電話のキーは数字であると同時にアルファベットでありひらがなでもあり、変換すれば漢字にもなり、さらにはアドレス帳やダイアリーの入り口にもなっている。そんな複雑なこと、確かに納得できない。

両親の世代は^(注1)ブラックボックスというものを認めたがたく、仕組みを理解しないと使う気になれないのではないか。一方、分数の足し算もできない子どもたちにとって、仕組みなんて難しいことを知りたいなんていう気持ちはもともとなくて、世界はブラックボックスだらけなのだからいっそうにかまわない。

(中略)

そんなわけで、老人はただでさえ^(注2)老人力がついているというのに、デジタル機器が^a普及したために加速度的に「役に立たない人」になりつつあるのだが、ワープロもろくに使えず、携帯電話にいたってはほぼお手上げ状態の両親を見ていて、私はある発見をした。

「老人からは、その人の最盛期の能力は推し測れない」ということだ。当たり前と思うかもしれないが、絶対的にそうで、私たちはつい⁽²⁾その重大な事実を忘れて、老人に対する敬意をなくしている。

(ロ)、^(注3)ダイヤル式に切り替わった途端に電話をかけられなくなったという、^{くだ}件の母方の祖母だが、母の姉妹たちは⁽³⁾口を揃えて「頭のいい人だった」と言う。母が七人きょうだいの末っ子だったために、私の知っている祖母はすでに七十歳を過ぎていて、私自身は祖母が頭がいいと思つたことは一度もなく、「親は子どもにはそう見えるものだ」ぐらいにしか考えていなかったのだが。

祖母には際立って人と違う何かを感じさせるところがあった。⁽⁴⁾私はある種の人間の原型として祖母を考えるようなところがあつて、祖母については短い話を書いたこともある。

祖母は、小学校を最初の一年間も在籍しないで辞めてしまったために、ひらがなとカタカナしか読めず、そのためにたぶん生涯一冊も本を読んだことがなく、それがどこまで影響していたかは知らないが、不信心でとことん現世的な関心しか持たず、抽象的な思考能力がいつさいなかった。

しかし思えば、明治・大正・昭和初期には本は総ルビ(＝ふりがな)だったのだから、努力すれば本ぐらい読めるようになったはずだ。祖母は、

死ぬ間際になっても人から説得されることが嫌いだっただけなの、度はずれた強情っぱりだったから、自分の弱味を謙虚に修正しようなどとは露思わず、得意なことだけで人生を勝負してやろうと考えていたのではないかと。不信心だった理由も、祖母にしてみれば、神や仏に手を合わせるなんて、根性なしの⁽⁵⁾負け犬のすること、「ここは人間の世界なんだから神も仏も必要ない」と思っていたのではないかと。（ハ）実際祖母は現世的に成功して、子どもたちに対して「威力」を見せつけた。

人間、年をとると、おせっかいで口うるさくなって、保守的で、^c穏当なことしか若い人に言わなくなるものだが、人間にはそれぞれの壮年期に、時に^(注4)アナーキーとも言える固有のパワーがあった。私自身には子どもがいないけれど、姪と甥はいる。あの子たちも、おじいちゃん・おばあちゃんのことを今の姿からしか判断していないだろう。しかし、

「おじいちゃん・おばあちゃんは、たいした人だったんだよ。あなたたちなんか、全然負けてるよ。」

と教えてやりたい。……いや、そんなことより、老人に垣間見られる断片から⁽⁶⁾壮年期のパワーを再現する方法とか推察力を作り出すことが、小説家としての私の仕事なのではないかと思う。

かつての社会には「古老」という存在がいたが、「古老」は「裏返しのヒーロー」というか、「引退して物静かになったヒーロー」というか、何と云えばいいか、とにかく特別な存在であることが要求されてしまうけれど、実際の老人にはそんな特別なところはない。

あるいは「おばあちゃんの知恵」。漬物の漬け方、食べ物の保存の仕方、⁽⁷⁾梅雨の時期の食あたりの防ぎ方……などなど、これも物静かできまにスローライフの時代にぴったりの知恵だけれど、老人になってもなお「役に立つ」ことが求められるところが、結局、老人を役立たずに追い込む効率優先の社会の発想なのだ。「おばあちゃんの知恵」もまた、人間を個々の技能の^d有無や優劣で判断してしまう社会の中の価値観だという点では同じなのだ。

人間は部分の集積ではなくて、分割不可能な全体として存在している。（二）人間を個々の技能の集積として見てしまう見方はすべて、本来の人間観からいうと間違いなのだ。

若いあいだに誰もが持っていたパワーは、個々の技能ではない。そういう技能Ⅱ部分を成り立たせる根底にあるものがパワーだ。最近、大学の心理学が人気だが、その理由のひとつが、^(注5)プロファイリング、犯罪心理学に対する関心で、高校生や大学生が自分の中に持っているパワーのことを、「反社会的なものではないか」と感じていることを表わしている。

老人となった人たちにもかつては、いまの高校生や大学生が自分に感じているのと同じパワーがあった。それがいない人間なんているわけがない。みんなそれぞれの中にあるパワーをなんとかうまく飼ひ馴らして、それを効率優先の社会の中での社会性に変形して、出世したり金儲けをしたりし

ていた。

老人とはそういう力の社会から退いた人たちのことで、社会が老人に対してすべきことは、「老人として、どういう役割があるか」ということを考えることなんかではなくて、その人が最盛期に持っていたパワーに対して敬意を持つことなんじゃないか。ただそれだけでじゅうぶんだ。そういう敬意さえあれば、老人は安心して老人力を^{ふる}揮っていられる。

（保坂和志『人生を感じる時間』草思社による）

（注1）ブラックボックス＝複雑な電子機器など、機能はわかっているが、内部の構造はわからない装置のこと。

（注2）老人力＝筆者は世間の常識や権威に無頓着であったり、気にしなくなった老人のありさまを「老人力」と呼んでいる。

（注3）ダイヤル式に切り替わった途端に……＝携帯電話が普及する前はプッシュ式が主流であり、さらにその前はダイヤル式の固定電話が一般的であったが、それより以前は電話機のレバーを回し、電話局の交換を呼び出してつないでもらう形式であった。引用本文より前で、ダイヤル式に変わったために電話をかけられなくなった筆者の祖母についての記述がある。

（注4）アナキー＝ここでは、社会の秩序や権威から自由なさま。

（注5）プロファイリング＝過去の犯罪のデータベースを基に、犯人の行動パターンや動機を推理・分析し、犯人像を割り出す方法。

問(一) 傍線部a～dの漢字と同じ読みをする漢字を含むものを、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

a	b	c	d
a 普及	b 完膚	c 風情	d 封鎖
b 謙虚	(1) 知己	2 証拠	3 興趣
c 穩当	(1) 福音	2 久遠	3 蛇行
d 有無	(1) 宇宙	2 融通	3 亜流
			4 割愛
			5 遊山

問(二) 空欄（イ）～（ニ）を補うのにふさわしい言葉を、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。（同じ番号を二度以上選

イ	5	ロ	6	ハ	7	ニ	8
---	---	---	---	---	---	---	---

- 1 むしろ 2 だから 3 しかし 4 そして 5 たとえば

問(三) 傍線部(1)「使えなくて当然だ」とありますが、「両親の世代」にとってなぜ携帯電話は使いづらいのですか。その理由としてふさわしいものを、

次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

9

- 1 子どもたちのように中の仕組みを理解して操作しているわけではないので、うまく使えないから。
- 2 これまでの機械と発想が全く異なる上に、内部の仕組みを理解することができないから。
- 3 これまでの機械と違って、内部の構造を理解しないと使えない仕組みになっているから。
- 4 小さな子ども向けに作られているので、必要最小限の使い方しかできないから。
- 5 内部の構造を理解することは可能だが、数字のキーの意味を把握できないから。

問(四) 傍線部(2)「その重大な事実」はどのようなことですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

10

- 1 デジタル機器の急速な普及についていけず、老人が不便を感じているということ
- 2 老人の現在の姿から、壮年期の力を推測することは難しいということ
- 3 潜在能力を発揮すれば、老人もデジタル機器を使いこなせるようになるということ
- 4 老人が最盛期と変わらない能力をいまも保ち続けているということ
- 5 社会のデジタル化によって、老人が「老人力」を使う場がなくなりつつあるということ

問(五) 傍線部(3)「口を揃えて」の言い換えとしてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

11

- 1 虚心坦懐に
- 2 一気呵成に
- 3 異口同音に
- 4 当意即妙に
- 5 臨機応変に

問(六) 傍線部(4)「私はある種の人間の原型として祖母を考えるようなところがあって」とありますが、筆者は「祖母」のことをどのように考えていますか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

12

- 1 小学校をすぐにやめてしまい字もろくに読めなかったが、抽象的な思考能力には秀でていた。
- 2 現世においては神仏よりも自分の方が正しいと周囲の人間に思い込ませた。
- 3 現世的な成功を望んではいたが、人の言うことを聞かず徹底的に努力することを避けた。
- 4 本も読めず思考能力も貧弱であることに引け目を感じながら努力して成功した。
- 5 自分の持っている能力を最大限に活用して、現世的に生きること貫き通した。

問(七) 傍線部(5)「負け犬」を用いたことわざ「負け犬の遠吠え」と同じような意味を持つ慣用句としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

13

- 1 虚勢を張る
- 2 ほぞを噛む^か
- 3 愁眉を開く
- 4 腹をくくる
- 5 二の足を踏む

問(八) 傍線部(6)「壮年期のパワー」とありますが、ここでいう「パワー」とは具体的にはどのようなものですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

14

- 1 一人の人間が持っている様々な技能を寄せ集めた力
- 2 最盛期の人間が持つ他を圧倒するような身体的な力
- 3 人間を反社会的行為に駆り立てる非常に危険な力
- 4 人間を分割不可能な全体として成り立たせている根源的な力
- 5 人間を効率優先社会になじませ、出世や金儲けに導く力

問(九) 傍線部(7)「梅雨の時期」とありますが、「梅雨」と同じ意味をあらわす言葉としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

15

1 時雨 しぐれ

2 春雨 はるさめ

3 五月雨 さみだれ

4 小糠雨 こぬかあめ

5 驟雨 しゅうう

問(十) 筆者は老人とどのように向き合うべきだと考えていますか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

16

- 1 老人は出世や金儲けの世界から身を引いた人達であり、そういう社会に関わることなく余生を楽しんでもらうべきだ。
- 2 老人がかつて持っていたパワーや技能をそのままにしておくのではなく、何か社会で生かせる道がないか考えてやるべきだ。
- 3 効率優先の社会の中で老人を埋没させないために、老人に助けの手をさしのべて元気づけるべきだ。
- 4 老人を社会的な役割という面からみるのではなく、過去に固有のパワーを十分に発揮してきた人間として尊重するべきだ。
- 5 かつて持っていた荒々しいパワーが抜け、静かに穏やかに暮らす老人を見習い、手本とするべきだ。

問(十一)

本文の内容と合致するものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。

17

- 1 人間は年を取るとおせっかいで口うるさくなるが、それは壮年期に持っていたアナーキーな力の名残りである。
- 2 携帯電話が使えない両親が侮られないように、姪や甥には昔は優れた人物だったと思いこませておきたい。
- 3 最近、反社会的なパワーを持った若者が多くなり、犯罪心理学に対する人々の関心が高まっている。
- 4 効率優先の社会においては、それぞれが抱えている危険なパワーを制御し、社会性を身につけることが出世の近道である。
- 5 「おばあちゃんの知恵」は役に立つものだが、そこには老人を技能的なものだけで判断しようとする発想が見て取れる。

設問は以上です。